

南山城村は京都府の南東端に位置し、滋賀県、奈良県、三重県に接する府下唯一の村で、面積約64^{km}2の約4分の3を山林が占める。近年、過疎化の波により人口・世帯数とも減少傾向にあることから、村役場では『南山城村田舎暮らし定住促進奨励金制度』等を設けるなど、子育て世帯や転入者の定住促進により、人口減少防止と活力ある村づくりを推進している。

童仙房(どうせんぼう)は南山城村の北部、標高500m前後の高原にある。面積は約12・7^{km}2、土地は温潤で地下水に恵まれ、気温は平地より5度前後低く、夏期は木陰では涼しさを感じる一方、冬期の寒さは厳しいといった自然条件を備えている。地名の由来について諸説ある中、奈良に平城京ができる

より更に前、この地に多くの僧が集まり、堂が千ほども作られたことから、「堂千房転

～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第48回 京都府・南山城村



一般財団法人 日本不動産研究所

当時、周辺の柳生藩、藤堂藩、同41年には電電公社の電話が御料が童仙房の所領を主張して争い、幕府より、いずれにも属さない土地、すなわち空白地帯(空地)とされたため、税が掛からない土地といふことで常に争いが絶えないまま、明治に至ることとなる。

村づくりの原点

明治に入り、廃藩置県後、童仙房は京都府に組み込まれた。明治2年、禄を失った武士の救済もあって、空地である童仙房の開拓が、府の官營事業として行うことが決められた。明治4年に開拓が完成し、当初の計画にあった土族の転入は諸般の事情により取りやめになったものの、京都

独特の風土が織りなす茶畑の文化的景観が広がる。域にあり、なかでも童仙房は厳しい自然条件を生かしながら、独特の風土が織りなす茶畑の文化的景観を作り上げている。高品質に特化して、香り高い、深みのある、上品な味わいの高級茶を生産し、人気を呼んでいる。



開拓150年 童仙房のあゆみ

不撓不屈の開拓精神を継承

じて「土干房」と呼ばれた。その後様々な標記がなされたあと、現在の童仙房となったとも伝えられているが、真偽の程は定かではない。また、童仙房に関して歴史は何も残っておらず、人が住んでいたか否か、どのような人たちが暮らしていたのかについての記録はない。

無税の空白地帯

童仙房の歴史を語るることができるのは江戸時代以降で、

市内や郡内の有志を募り、移住が開始された。明治5年には、京都府支庁が童仙房へ移され、役所のほか警察署や郵便局なども置かれてにぎわいを見せたものの、明治12年に童仙房支庁が廃止されたからは徐々に発展のスピードも鈍り、のどかな純農村へと変貌。自然条件が過酷なため、離村する者も多

くいた。

その後、昭和23年に電気が通り、同34年に有線電話が、

心を送っている。南山城村は日本を代表する高級茶の生産

「童仙房は開拓地なので、地域の人たちは開かれた気持ちをもっています。私たちはこの先、都会の人と地元の人が調和し、共存できる地域を目指しています。」といった住民の方々の思いのもと、祖先の不撓不屈の開拓精神を受け継ぎ、南山城村、童仙房区、南山城村体験観光推進協議会等が中心となり、官・民協同でより良い村づくりのための活動が行われている。

(京都支所／不動産鑑定士・堀内隆平)



開拓150年を迎えた昨年、建てられた開拓記念碑